



お江戸舟遊び瓦版 1149 (2)号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

小松由佳「シリアの家族 (2)」 集英社 25. 11. 30

第6章 第二夫人騒動 2022年9月 トルコ

- 2016年に子どもが生まれて以来、初めて単身で向かったシリア取材。秘密警察からの監視、親族による軟禁にも耐え、取材を全うすることができたのは、まだ幼い2人の子供たちが、トルコで夫とともに私の帰りを待っていたからだった。
- 2022年9月、11年ぶりの取材を終えた私は、隣国のレバノンへと陸路で移動した。首都ベイルートは、中東における金融、商業の中心と繁栄し、その華やかさから“中東のパリ”と呼ばれた時代もあった。しかし、2019年以降、レバノン経済は危機的状況に陥っていた。
- シリア中部ホムスのホテルに到着するなり、ロビーで待ち受けていたのは2人の男性で、秘密警察だった。「お前の夫の Facebook アカウントを見せなさい」と言い、私のパスポートを人質に取った。私は「シリアで毎日、日本大使館と連絡しています。夫の Facebook を強要するのなら、日本政府に報告しなければなりません」と言い返し、追及は止まった。
- 飛行機を降りた私は、家族との再会をうっとりと思い描いていたが、子供の姿はなく、夫の雰囲気も違っていった。夫とカフェに入り、夫は「君は大切な存在だ。だが自分は夫として、十分に面倒みられていない。だから第二夫人を娶りたい」。私はレモネードを吐き出しそうになった。「由佳は家の外で働くのが大好きだろう。好きなだけ外で働きに出てもいいよ。その代わりに、自分と第二夫人の生活費を出して欲しい。」私は啞然とした。第二夫人候補は夫の兄であるマーヘルマーヘルの妻の妹だった。夫は、1年ぶりにトルコを訪れ、兄たちがいかに妻たちから面倒を見られているか目のあたりにして、決めたらしい。
- シリアでは10年以上内戦が続き生活インフラが崩壊し、国民の9割が貧困ライン以下である。シリア北部と国境を接するトルコは、シリア難民の半分以上を越える360万人が暮らすシリア難民の最大の受入国だ。相次ぐ難民の大量流入に不満が高まるようになったトルコでは、2016年以降、厳しく制限するようになった。
- 比較的安定した生活を獲得しつつあるトルコ在住のシリア人が、シリアから花嫁を招聘し、男性は花嫁の越境費さえ払えば、若く美しい第2夫人を選ぶことができる。もうひとりの“女としての私”が心の中でつぶやいた。夫への信頼感は急激に失われたが、彼らの文化的品位を貶めないようにした。親族会議が開かれ、夫が私と結婚し日本に暮らす経済的メリットや、義父ガーセムが私を一家の大切な人と認めていたこともあり反対され、この話はなくなった。

第二部 アサド政権崩壊 第7章 歴史的瞬間 2024年12月 シリア

- 2024年12月8日、シリア人移民の取材のためイギリスを目指していた。ロンドン空港に到着するなり、スマートフォンの画面に「アサド大統領が国外へ逃亡。政権が崩壊した——」と。反体制派がイドリブから進撃を始め、わずか12日目のことだった。54年間にわたり、親子で独裁を維持してきたアサド政権、幕切れは劇的なものだった。
- 2011年以降、内戦状態にあったシリアでは空爆や戦闘で50万人以上が死亡し、500万人が難民となって国外へと流れ、国内では720万人が避難生活を余儀なくされた。そこに突如起こった政権の崩壊は、14年の内戦の終結と政権による抑圧からの解放を告げるものだった。古くから栄えたアレッポを24時間足らずで反体制派が掌握した。決して落ちないとされていたアレッ



ポの制圧には、夫は本当に驚いた。今まで支援のロシアが空爆による軍事支援をしなかったからで、背景にウクライナ侵攻によるロシア軍の疲弊が指摘される。2024年11月にはシリア各地のイラン民兵組織の軍事施設がイスラエル軍による空爆で壊滅的打撃を受けるなど周辺の情勢変化を受けアサド政権の協力者たちも弱体化し、反政府軍はその機を逃がさなかった。

- ・ フリーランス写真家である私の頭の中では、13年ぶりに故郷に帰る夫の瞬間を記録したいとシリア取材が膨らんだ。心が揺れる夫を説得し、12月6日レバノンのハリリ空港で待ち合わせた。8歳の長男サーメルも同行した。アサド政権崩壊8日後12月16日シリアに入国した。タクシーは山岳地帯を通過し、シリア側へと国境を越え、まず目に入ったのはかつての二人の大統領の巨大な写真であったが、ズタズタに破られていた。シリア人ならば「サイドナヤ刑務所」の名を知らない者はいない。常時数千人が週間のアサド政権抑圧の象徴として恐れられてきた。2012年には夫の兄のサーメルが収監されているらしいと耳にしていた。

第8章 サイドナヤ刑務所 2024年12月 シリア

- ・ 2011年以降、シリアでは、アサド政権反対派を中心とする13万人以上が政府軍によって拘束され、“無実”のものたちも多く含まれていた。政権崩壊から9日が経過したサイドナヤ刑務所は、すべての建物の扉が開かれ、かつての看守たちは誰一人残っていなかった。囚人の死因のほとんどが、拷問、暴行や栄養失調、処刑によるもので、信じがたい残虐行為が報道機関で報じられた。忘れがたいのは、拷問危惧、処刑器具などがそのまま残されていた。
- ・ 2011年以降、アラブの春の影響から、シリアでも民主化を求める運動が始まり、今回案内してくれたマジェドとバラカードはごく自然に民主化運動に参加した。大規模デモ行進に参加し、逮捕された。拷問は朝夕2回全員に行われ、毎日のように人が死んでいった。マジェドは5年半囚人生活後、突然釈放されたマジェドは「精神に異常をきたすと、近いうちに死ぬ」と語った。

第9章 13年ぶりの故郷 2024年12月 パルミラ

- ・ アサド政権崩壊から13日目の12月20日、夫とサーメルとパルミラを目指していた。夫はこの文化で育ったが、この13年間そうでない文化も目にしてきた。躊躇する夫とともに親族の住むパルミラへ行った。夫は次男アフマドに会うと「おお！会いたかったよ！」と一変した。
- ・ 私は、この街の悲惨な光景、取り巻く環境を全身で感じていた。2年前は秘密警察の監視下に置かれ、写真を撮ることもできなかったが、アサド政権が消滅したことで、住民の表情や言動には明らかな変化が生まれ、驚かされた。

第10章 消えた秘密警察 2024年12月 シリア

- ・ かつてアサド政権下では、逮捕されない限り入ることも近づくことも許されなかった秘密警察の拠点、反体制派の兵器庫としている他は、もぬけの殻だった。
- ・ 2024年11月20日午後、2機の戦闘機が飛来し、ミサイルが発射された。空爆はイスラエルにより、親イラン民兵組織ヒズボラの関連施設で、92人が死亡した。11月20日以降イラン軍は1人残らずパルミラから去り、アサド政権崩壊前なのに軍服を私服に着替えていた。イラン軍は政府軍兵士よりはるかに多く、3000人ほどで、去っていく光景に住民は息を呑んだという。今、目の前に散乱している大量の軍服や軍靴はその時のものと思われる。
- ・ イスラエルはパルミラを始めシリア各地のイラン軍の軍事施設、ヒズボラの拠点を空爆し、徹底的に軍事力を潰し、朝徐政権崩壊の大きな要因を作った。パルミラに、イラン軍やロシア軍の外人部隊が駐留し始めたのは、ロシア軍の空爆支援を得て、シリア軍政府軍がパルミラを最初にISから奪還した2016年3月頃からだとされる。
- ・ たった一人の人物が経験した、繁栄と滅亡。権力の頂点に君臨したようで、実際は周囲の権力者たちによって操られる脆い立場にあったのではないだろうか。

所感：トランプを始め、世界の権力者が君臨する政治体制の中での余りにも悲しい現実を知ることができた。著者は、2006年世界第2位の高峰K2を日本人女性として初めて登頂、風土に根ざした人間の営みに惹かれ、草原や砂漠を旅する写真家だ。是非本書を手にして欲しい。(文責 中瀬)